

森林防疫ニュース

No. 6. 林野庁 森林害虫防除室 1952. 9. 1

隣の火事に安閑としている馬鹿はあるまい。病虫害も境界などに向お構なく拡がる。お互に隣の火事の積りで小火のうちに消止めてもらいたいものだ。

日露の役では栗玉蜂の虫癭を勝栗といつて戦勝の兆とした。こんどもその吉兆が現われたが、戦に敗れた。むしろ始めから勝栗を征伐しておけば今の栗玉騒動は未然に防げたのに。

栗玉蜂の被害が 28 都府県に及んで初めて防除の国庫予算が計上された。吾々の責任も重大となつた。

マイマイガの防除所見

石川県経済部長 関 盛 吉 雄

昨年石川県の加賀地方に突如として老大な区域にマイマイガの発生を見た。この被害は薪炭林では 6, 7 月頃に早くも冬枯れを思わせるような悲惨な状態を呈した箇所が多く又杉、漆等の造林地或は麦や水稻にまで及んで林業家は勿論、農家を脅威し且つ他の産業にも甚大な影響があつたので県としてはこれを放任して置けず林野庁へ救助方の陳情をしたところ、長官はじめ係官の並々ならぬ御努力によつて法制化せられ相当の防除処置が出来得たことを県民と共に衷心感謝に堪えない次第である。

既往二ヶ年に亘る体験からして、ここに二、三の防除所見を述べて大方の参考に供したい。

マイマイガのような森林に集団発生して甚大な被害を惹起し、且つ今後も警戒を要する特性をもつ病虫害は予め広範に法に指定して仮令小区域の発生と雖も安易に国の援助を得て早期に且つ徹底的な駆除事業が実施し得るように法的措置を講じて置くべきではないかと思つた。

次に本年六月新に実施した薬剤駆除事業の薬剤は幸い黒椿象用の備蓄を機敏に転用し、撒粉機は病虫害防除所のものを多数借用して予定期間内に事業を完了したが、斯様な薬剤その他防除用器材は政府において平素整備して急速に譲渡、貸与出来得るような態勢を整えて置くと同時に今後更に誘蛾燈利用の研究等の必要をも痛感させられた。

又斯様に異状に蔓延して被害を起すような病虫害の発生、経過、処置等の情報交換については防疫ニュースによつて全国的に報導せられるので今後防除効果を挙げ得る確信をもつものであるが、凡そ広大な山野の被害こそは特に防除の困難性から未然に防止するか早期防除に限るものであるから被害通報の義務も必要であろうが、防除事業を適時に経済的に行うためにも病虫害発生の予察機構を国、県に常備して、これによつて得た資料に基いて早急に適確な防除計画を実施出来得るような法的措置を講じ病虫害による森林の被害を最小限に止めて森林生産増強に寄与することこそ刻下の緊急要務ではないかと思料せられる。

情 報

◇ 発生速報 病 害

○ ヒノキ苗のペスタロチヤ病

鹿兒島 鹿屋営林署 一回床替苗約 4 万 7 千本の 70~80% 播付床で極端に密生して軟弱に育つた苗が床替により急に陽光を受け「日枯れ」を生じた事が誘因となり著しい被害を起した。(林試)

虫 害

○ トビナナフシ

宮 崎 東諸県郡本庄町大字竹田字井手山の 10~35 年生のシイを主林木とする広葉樹林に発生。シイを最も好んで喰害するが、アラカン、クリ、クヌギ、コナラ、時にはサカキをも加害、被害面積 3 反歩、被害本数 1,800 本。(伊藤武夫)

○ オオキンカメムシ

島 根 八束郡下の講武、大芦、加賀、野波、千酌、美保関、本庄、大野、意東、八雲の各町村の被害面積 312 町歩。能義郡下の広瀬町、山佐村の被害面積 30 町歩。大原郡下の大東町、海潮村の被害面積 11 町歩。飯石郡鍋山村の被害面積 1 町歩。簸川郡下の平田町、乙立、田儀の両村の被害面積 14 町歩。邇摩郡下の大森、温泉津の両町大代、井田、福波、湯里の各村の被害面積 50 町歩。邑智郡下の谷住郷、川越、祖武の各村の被害面積 42 町歩。那賀郡江東村の被害面積 33 町歩。被害面積合計 493 町歩に達している。(8.10.)

○ クヌギカレハ

鳥 取 岩美郡下の字野野、福部、小田の各村鳥取市のナラ、クヌギ、クリ、カキ、モモ、ウメ、マツ等に発生。被害面積 1,300 町歩。(7.24.)

○ ク ス サ ン

北海道 千歳郡千歳町のクリ(平均樹令 35~40年生及び 60~70年生),その他ナラ類,カバ類,アサダ,サクラ等の闊葉樹林に発生,被害面積 280町歩,被害本数 250,000本, 6月 23日に調査を行つた処,卵が孵化し,幼虫は卵の附近に群状に集合していた。(7.17.)

○ マ イ マ イ ガ

北海道 石狩郡当別町字材木沢のカラマツ 19年生の人工造林地に発生,激害面積 4反歩,被害本数 800本, 6月 25日頃少数の幼虫を発見, 7月 4日に至り発生数多くなり,耕地に移動している。樺戸郡新十津川村字盤之沢のカラマツ 13年生の人工造林地に発生,激害面積 5反歩,中害面積 1町 5反歩,被害本数約 4,000本,被害は初め北面急斜地の山頂附近に発生,漸次山腹に蔓延,周囲耕地及び原野にも6月中旬頃から被害発生,(7.17)留萌市峠下ぼるもつべ,藤山町のカラマツ 8~11年生に発生,立木の全新葉が喰害され,激害面積 6町 5反歩,被害本数 10,150本。被害は次第に附近の農作物(水稻,トウモロコシ,エン麦)に移動し,特に水稻の被害が甚しい。

石狩国空知郡芦別町字黄金のカラマツ 13年生造林地に発生,被害面積 6畝歩,被害本数 180本,石狩国雨竜郡多度志村字屈狩のカラマツ 8年生造林地に発生,被害面積 4反歩,被害本数 1,100本。石狩国空知郡音江村のカラマツ 3~25年生造林地に発生,被害面積 1,000町歩,被害本数約 250万本。同地は果樹園地帯のため果樹,農作物に被害が及ぶ時は,重大な影響があるので,同村森林組合と病虫害防除推進委員本部と合同,駆除実施。天塩国苫前町字長崎のカラマツ 1年生及び 8年生の造林地に発生,被害面積 1町 3反歩,被害本数 3,500本。(7.23)

○ ス ギ ハ ム シ

鳥取 岩美郡宇倍野村,鳥取市地内の稻葉山の標高 240m附近一帯の採草地に点在するアカマツの天然生 10年以下の稚樹に発生,被害面積 7町歩,被害本数 300本。東伯郡由良町のマツの 10年生以下の人工造林地に発生,被害面積 2町歩,被害本数 6,000町歩。同郡高城村の植栽後 6年のマツの人工造林地に発生,被害面積 5反歩,被害本数 1,500本。(7.24.)

宮崎 西諸県郡の真幸,飯野,高原の各町,加久藤,須木の両村,北諸県郡下の高城町,西岳村,小林市,宮崎郡清武町,日向市のスギ,マツに発生,人工造林地の被害面積合計 855町 6反,天然林 789町歩,この内水源涵養林の被害面積 409町歩,県行造林地 19町歩,一般公有林 186町歩,民有林 1,030町 5反。(7.23.)

○ ハ ン ノ キ ハ ム シ

長野 西筑摩郡大桑村野尻,阿寺経営区 91林班のヤマハンノキ 20年生(砂防植栽木)に発生,被害面積 0.2 ha. 緑葉を盡く喰害。(和田幸造 8.10.)

○ タイ コ ン キ ク イ ム シ

○ ハ ン ノ キ キ ク イ ム シ

大分 下毛郡西谷村字平原のクリ(銀寄) 7~8年生に発生,被害面積 7反,被害本数 200本に及ぶを 6月 3日確認。本種による被害状況は主として主幹に侵入しているが,支幹をも加害す。好んで分枝部から侵し,一定の深さ(2~3cm)水平に直孔し,その後年輪に沿つて穿孔して産卵。幼虫は樹幹に沿つて穿孔するもの様である。被害樹は殆んど枯死し,容易に被害部から折れる。

○ カ ラ マ ツ ハ ラ ア カ ハ バ チ

北海道 札幌郡豊平町字真栄,有明のカラマツ 20~30年生の人工造林地に発生,中害面積 97町 3反,微害面積 185町 4反,被害本数 227,173本。

○ マ ツ ノ オ オ キ ク イ ム シ

北海道 北見国常呂郡訓子府町字大谷のカラマツ 20年生造林地に発生。被害面積 2反歩,被害本数 112本(内 7本は既に枯死)。防風林のため枯死した場合農作物に対する影響は甚大。(8.6.)

○ オ オ ス ジ コ ガ ネ

北海道 石狩国雨竜郡多度志村字屈狩のカラマツ 26年生造林地に発生,葉を喰害,被害木は黄緑色を呈している。激害面積 1町 5反歩,中害地 5反歩,微害地 3町歩,激害本数 2,000本,中害本数 600本,微害本数 4,000本。(8.6.)

○ ク リ タ マ バ チ

埼玉 北足立郡片山村大字片山に於いて 5本,同郡大和町大字野火山に於いて 1本,何れも樹令 20~30年生のものに発生を 7月 28日確認。所沢市の西武鉄道会社西武園内にて 5~20年生のもの 4本に発生を 7月 30日確認。(8.5.)

大分 下毛郡真坂村,東国東郡富来,武蔵の両町,旭,中武蔵,西安岐の各村にて発生を確認,現在の被害面積 3町 8反,被害本数 1,406本(何れも栽培栗)(林務課,泥谷藤美, 6.20)

下毛郡山口村字田口,耶馬溪村字福土に発生,被害面積 4反,被害本数 200本。(8.5)

◇ 防 除 速 報

○ キ オ ビ エ ダ シ ヤ ク

鹿児島 熊毛郡下の種子ヶ島全島及び屋久島一円のイヌマキ等に大発生したことは既報したが,枕崎市市内にも発生し,これに対して薬剤撒布を実施することとなり,試みに DDT 乳剤 1,000倍液を撒布した所,翌日殆んど死亡。2回位の撒布で全滅することが判つた。(ロノ町安雄 7.28.)

◇ 詳 報

役に立たない杉

森林の樹木が病害虫におかされて樹の葉が変色したり、無くなつたりすると森林所有者は非常に心配し、種々な対策を考えるようになった。その心配なことについては林業技術員に相談し、それが大きな被害であれば県庁まで相談を持ち込むようになった。こんなことは今まであまりなかつたことで林業技術普及機構を通じて森林衛生思想がある程度滲透し始めたことを立証する最近の傾向である。終戦後のわが国では林業経営を集約化して少しでも木材自給態勢を近づけようとする努力が必要とされている時であるから、この傾向はまことに喜ばしい現象である。

しかし森林所有者の関心は、虫に喰われたり、不時に黄葉したりすることには注がれても、急激な変化を伴わない被害にまでは未だ及ばないようだ。遠くから眺めただけでは何の変りもない杉の林が、中に入つて見るとその半分以上も役に立たない杉であつたとしても、今更どうにもならないことと諦めているのが普通のものである。ところがこの役に立たない杉が埼玉県には相当分布しているらしい。いや、埼玉県ばかりでなく、この種のもは全国的に広く存在しているのではなからうか。これはひとり森林保護の問題であるばかりでなく、造林上の根本問題でもあるので、埼玉県林務課の熊井技師はこれに非常な関心を寄せている。

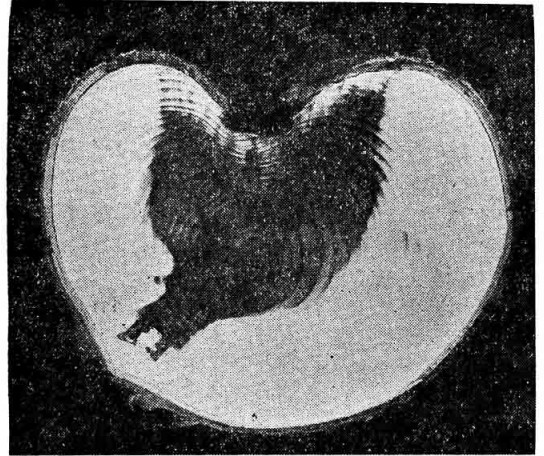
筆者は同技師の案内で同県比企郡大河村でこの

第1図 病害部の外観



(林試 伊藤氏 原図)

第2図 病害部の断面図



(林試 伊藤氏 原図)

役に立たない杉を観察した。案内された杉林は2ヶ所で、1ヶ所は面積約2町歩林令50年生位の林で罹病率は60%位、他の1ヶ所は面積約5町歩林令20年生位の林で罹病率は50%位であつたが、秩父方面には90%の罹病率の処もあるとのことだつた。罹病した杉は地上1~2mの高さの幹に第1図で見られるような腐があり、腐の部分はそう大きいものではないが、形は不整形で多少細長くなつているものが多く、木質部はその腐で深くえぐられ、その周辺は樹皮が隆起し、その部分全体が不規則な瘤状を呈している。その横断面は第2図の通りである。そしてその腐の部分から幹の内部に心腐が入り込んでおり、樹全体も樹令相当の半分の年数の發育もしていない。樹高も当然健全木と比較にならないが、樹冠だけは青々としているのである。これは北島博士*のいわゆる溝腐病によるものと思われるが、溝腐病そのものも病原菌や罹病の原因が究明されていない。熊井技師はこれは苗木時代にPhoma菌におかされた軽い赤枯病の傷痕が原因になつていてのではないだろうかという疑問があるといふので、森林所有者に警告し、苗木養成業者の猛省を促している。若し仮りに熊井技師の推察通りだとすれば、その警告を全国的なものとしなければならぬ。

それには先ず以つて樹病の実態を究明しなければならぬので林業試験場の伊藤博士、千葉技官に研究をお願いしている。いずれにしてもこのような樹病については、苗木購入の際に注意する必要があるし、又成林後気が付いたら成るべく早く部分的な改植をしなければならぬ。

この種の樹病は他にも種々あるようだが、とりあえず、この樹病の分布状態を知りたいので読者各位の情報を待望する次第である。

(防除室・河合)

[*] 北島君三：樹病学及び木材腐朽論

油桐害虫オオキンカメムシの生態

オオキンカメムシは年1回の世代をなし、成虫態で越冬する。ことに越冬時、冬の寒さが酷しい時はより抵抗力の強い体となり越冬し、その翌年～翌々年には大発生をすることが推察されている。7月中旬より8月初旬にかけ最も多く産卵する。卵は初め紫色であつて、3日～4日経過すると赤色に変じ、更に赤色が色を増し孵化する。卵の期間は4日内外にして、孵化すると1齢～5齢を経て成虫となる。

1 齢の期間	3 日内外	大きさ	3 mm
2 齢の期間	6 日内外	大きさ	4～6mm
3 齢の期間	4 日内外	大きさ	6～8mm
4 齢の期間	11～12日	大きさ	8～10mm
5 齢の期間	10～11日	大きさ	10～12.5mm

9月初め成虫となり、10月落葉時まで樹上にて生活する。落葉と共に地上に落下生活する。越冬は北面林地に移動越冬する。北面は寒暖の変化が少ないのでこの害虫の越冬に適する。(島根・林試)

オオキンカメムシ薬剤駆除室内実験

この薬剤による殺虫室内実験は二回の試験を行い、供試した虫は油桐栽培地から採集したものの内、元気旺盛な第2齢幼虫で1個のシャーレに25頭づゝ入れた。

第1回試験(7月29日～7月31日)

小型シャーレ(径9cm、深さ2cm)を22個準備して、その中に湿砂を1～2mmの厚さに置きその上に濾紙を敷き各々のシャーレにはオオキンカメムシ25頭づゝを入れた。このシャーレ2個を1組として、1組毎にBHC乳剤(10%)の0.05%液、BHC水和剤(5%)0.05%液、BHC粉剤(0.5%)、同上粉剤(1.0%)、クロールデン(5.0%)、ネオエステル1,000倍液、同上600倍液、ペントリン1,000倍液、同上600倍液、デリス600倍液をそれぞれ撒布し、その中に油桐の葉を少し入れてガーゼで覆う。

他に1組の薬剤を撒布しないものを作つて、その中における活動状況を見ながら、薬剤撒布のものと比較して、薬剤撒布後2、17、24時間の3回に亘り、虫の状態を調査した。その結果2時間後状態は薬剤の種類によつては全く殺虫されないものが4種類、最高の殺虫率を示めたものはBHC乳剤で82%である。24時間後の成績は殺虫率100%のもの4種類あり、最低はペントリン1,000倍液の76%である。

供試した薬剤の製造工場はBHC乳剤、同水和剤、同粉剤1.0%は三井化学、BHC粉剤は日産化学、デリスはカンコウ殺虫剤、デリス600はロテノン4%原料の600倍液である。

第2回試験(8月1日～8月3日)

第1回試験の結果、薬剤効果のあつたものはBHC乳剤、BHC水和剤、BHC粉剤、デリス、

クロールデン等で、今度はこれ等の薬剤を小型シャーレ大型シャーレの1組として、第1回と同様湿砂と濾紙を敷いた上にオオキンカメムシを何れも25頭づゝ入れて撒布試験を行つた。その結果2時間後の状態で最高殺虫率を示めたものはデリスの96%とBHC粉剤(0.5%)の88%の2種であり、最低はBHC水和剤の0%であつた。48時間後の成績で100%を示したものが3種類、最低はBHC水和剤の80%となつて居る。

第2回試験の結果BHC粉剤において0.5%剤の方が1.0%剤より殺虫率の高い結果を示したものが来て来たが、之は要するにその撒布量の如何で稀薄なものでも効果を表わすものと認められる。

以上によつて室内実験において薬剤によつて完全殺虫可能な点が確認された次第である。そこで第2回試験で効果があつた薬剤を用いて油桐林で近く実地試験を行う予定である。(島根・林試)

マツノクロホシハバチの生態に就て

幼虫は主としてカラマツの葉を喰害し、これを喰い盡すと巳むを得ずアカマツも喰害する。

経過 年2回の発生で幼虫態にて繭内で越冬、翌年5月蛹化。6月中旬羽化、これが第1化の成虫で8月中旬頃第2化の成虫が出て産卵する。

習性

態別	習性	第1化	第2化	摘要	
卵	産卵個所	針葉内片側 1芽集団産卵	針葉内片側 1芽集団産卵	産卵の終りたる成虫は数日間その卵群の上で徘徊して居ることが多い	
	抱卵数	未調査	平均91		
	産卵時期	6月中旬 ～7月中旬	8月中旬 ～9月中旬		
幼虫	孵化当時	卵群毎に集団喰害	卵群毎に集団喰害	幼虫は音或は他のものが近づくとはげしく頭を左右に振るのがある	
	老令期	混合集団1集 団35～118頭	混合集団 未調査		
	営繭直前	散	開散		開
	脱皮回数	未調査			(5)
	幼虫期間	6月下旬 ～8月中旬			8月下旬 ～10月下旬
蛹	蛹化個所	繭	内繭	内	蛹期は甚だ短く第2回のもものは最短日のものがある
	蛹化時期	8月中下旬	未調査		
繭	営繭個所	被害樹の樹皮又は下木	地表上の落葉又はフォーム層	営繭は夜間行われる	
	営繭状況	樹幹を上下して営繭	樹幹を下降して営繭		
	営繭時期	7月下旬 ～8月上旬	9月中旬 ～10月下旬		
成虫	発生時期	6月中旬 ～7月上旬	8月中旬 ～9月上旬	成虫は繭を蓋状に嚙切つて脱出する	
	産卵状況	針葉の片側を溝堀し卵を縦に3～17個配列し蛹層を以て埋める	第1化に同じ		
	雌雄比	未調査	♂16♀84		

註 浅間山麓海拔900m附近に於ける調査(林試)

解 説

動力撒粉機について

近時薬剤使用による山林樹木の病害虫防除が盛んに行われる様になり、然もその方法は機械化されて来て、動力撒粉機による粉剤撒布法が能率の点から圧倒的に多く、この傾向は今後益々強められようとしている。

現在林業で多く用いられている動力撒粉機は煙霧機と兼用で、二輪車を有し、手押可搬型の 2.5 馬力の発動機を有するものと、脊負型で約 0.7 馬力の発動機を有するものとあり、代表的なものの要目は次の通りである。

要 目	動力撒粉機兼 煙霧機	脊負動力撒粉機
重 量	88 (車台を離脱 kg\すると63kg)	13kg
長 さ	2.00m	50cm
高 さ	1.02m	45cm
巾	0.78m	57cm
薬槽容量	粉 剤 槽 18 l 煙霧剤液槽 10 l	10 l —
撒布能力	粉剤・最大毎分3kg 煙霧・最大毎分12m ³	最大毎分1kg —
風速(吐出口)	毎秒 40m	毎秒 45m
使用エンジン 型 式	空冷4 衝程式単筒 ガソリンエンジン	空冷2 衝程式単筒 ガソリンエンジン
同 気 筒 容 積	148cm ³ (2.5馬力)	23cm ³
燃 料	ガソリン及び燈油	ガソリン13容, モビール1容の 割合の混合燃料
燃料槽容積	5 l	1.2 l
燃料消費量	毎時0.8l	毎時0.4l

2.5 馬力の動力撒粉機は能力大で、広大な面積高い樹木の防除作業等に適し、又機体を車台から切離し、担架して足場の悪い場所で操作したり、噴口に長さ 12 尺程の噴管を附して薬剤の高所撒布を行うことが出来る。

脊負型動力撒粉機は単身脊負つて軽便な作業が可能で、特に峻険な山地には好適である。動力撒粉機の取扱い方のうち簡単な事柄で然も重要なものを挙げると、次の様になる。

1. 起動前の点検。特に発動機の潤滑油及軸受部グリスの補給は燃料の補給以上に重要である。使用前常にゲージで確めて補給をしておかねばならない。

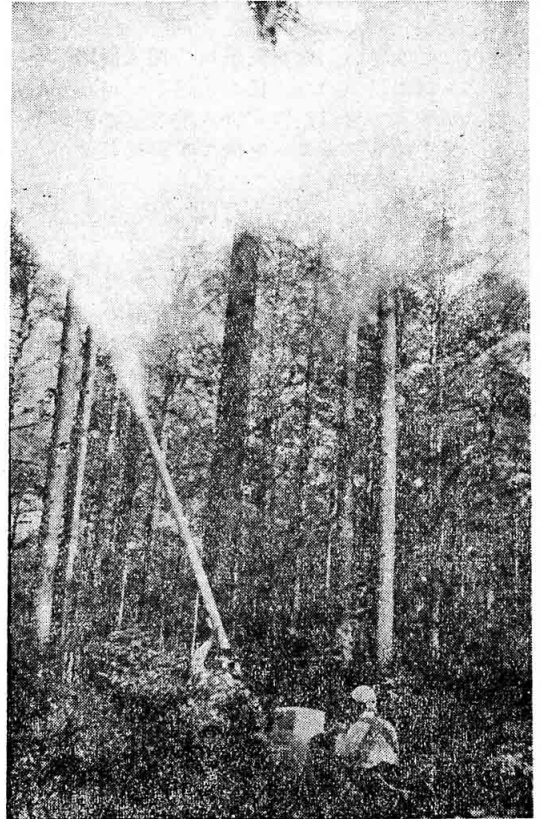
2. 暖機運転。発動機起動後 3～4 分、中速回転を行い機体を暖める。急激に高速回転を行うと発動機を損う。

3. 山地などで本機を 20 度以上傾斜して連続運転するときは潤滑油の回りが悪くなり、エンジンを焼付ける恐れがあるから注意されたい。

4. 粉剤は乾燥したものをを用いる。湿つている

と粉の分散が悪く、又薬害などを生じる。湿つたまま使用して苦勞するより乾燥して能率的にした方がよい。紙袋のまま一日天日乾燥した丈でも作業能率は 2～3 割違う。

5. 粉剤・煙霧剤共撒布作業には気流を充分調べ之を利用する。天候、地形、時刻により種々の気流を生ずるので、高い樹木や広い面積を作業するには是非良好な条件の下に行いたい。粉剤の濃度は出来る丈濃いものを薄く撒く方が山林防除には効果が多く、大変能率的である。たとえば、BHC γ 体 1%より 3%を使用するときは有効撒粉面積を著しく大にすることが出来る。



6. 煙霧剤として最も強力なものは DDT・BHC (γ 30%以上)の基剤をベンゼールの濃厚溶液にし、灯油を少量加えたものが良く、森林内の煙霧殺虫成績は良い様である。この問題は今後一層の研究を待つて、良い結果が期待出来ると思う。

7. 使用後の手入れを充分に行う。特に粉薬槽内の清掃、煙霧系統の洗滌を必ず実行する。

8. 長期保管には取扱説明書等により充分な特別手入れを行う。

以上の事柄はほんの常識的なものであるが、是非実行を要するもののみである。

其他ミスト・スプレーヤーと称して強力ファンによる高速風流の衝突によつて薬液を微細化、目的物に吹付ける機構のスプレーヤーが現われ、これについては杉苗の赤枯病の防除試験も行われている。(防除室)

質 疑 応 答

ナラ類のウドンコ病

【問】 クヌギ及びコナラの二年生苗の葉裏に5月初めより白色の斑点が生じ、次第に拡大すると共に白色の粉末を撒いたような症状が見られます。病名と防除法を御教示下さい。(千葉県)

【答】 この病気はこの他ミズナラやカシワ等に苗畑で普通に見られるもので、シストテカ、ラネストリスによるナラ類のウドンコ病と呼ばれます。防除法としては石灰硫黄合剤(ボーマ 0.3度)を撒布して下さい。尙石灰硫黄合剤は使用した噴霧器等を傷め易いので、使用後はアンモニア水かうすい醋酸等で洗った後充分水洗する必要があります。又手にもワセリンを塗って直接薬液がかからぬようにした方がよいでしょう。

(林試樹病第一研)

ネキリムシの防除法

【問】 まき付又は床替後の圃場におけるネキリムシの簡易適確な防除法を教えてください。

(長野県西筑摩郡檜川村 北村次男)

【答】 まき付或いは床替後の圃場に於ける根切虫の防除法はまだ決定的なものはありませんが、農業で麦の害虫「ハリガネムシ」の防除にBHC粉剤(γ3%)を撒布して効果があらわれた例がありますから、まき付又は床替後の圃場に於いても除草後同様な施用を(反当5kg程度)行い、粉剤が地中に混入する様に掻き起しをすれば有効ではないかと考えられます。現場でも近く試験をする予定です。実施時期は関東地方の場合、春季は6月以前、秋季は9月中旬より10月中旬までがよいと思います。尙、水和剤の利用も考えられます。

(林試昆研)

雑 録

◇ クリタマバチ防除に予備金支出

既報、全国クリタマバチ防除対策連合協議会の活動は、去る7月27日衆議院副議長室の大村会長、岩本衆議院副議長、井上良二衆議院議員の陳情委員と西村大蔵政務次官、河野主計局長の政府側との会見を大詰として予備金支出の見透しがついた。これに引続いて農林大蔵両省間に事務折衝が行われ、初め7,800万円の予備金支出が確実視されていたところ、思いがけない事情のために5,166万円と内定した。8月22日の定例閣議で正式に決定したが、その内容はクリタマバチ駆除事業費補助金5,000万円、事務費補助金150万円、本省費16万円となっている。この予備金支出は年間必要額1億円の半分として認められたのであとの半分の実現に更に努力が必要となつた。

◇ 保護専門技術普及員の研究及び調査の発表(2)

5. 「スギ黒粒枝枯病について」埼玉、熊井正善氏、被害状況、防除法の比較研究。

6. 「カタピロトゲトゲについて」新潟、長谷川行衛氏、昨年末調査した生態、BHC撒布による防除成績等。

7. 「マイマイガの被害経過報告」石川、安達滝雄氏、県南山間部19,000町歩に発生した被害状況、誘蛾灯、卵塊採取による防除法等。

8. 「カラマツ腐心病について」山梨、小野馨氏富士山麓3,000町(面当り50本)の発生状況。

9. 「ネキリムシ防除試験について」山梨、小野馨氏、イザリヤ菌によるネキリムシの防除試験

10. 「松喰虫関係について」京都、安村亜雄氏根株処理方法、天敵10種の調査、キボシゾウムシの増加等。

11. 「マツバノタマバエの薬剤駆除事業について」島根、成相光邦氏、隠岐島で猖獗の本種の生態、DDT、BHC、石灰窒素等による防除。

12. 「薬剤による森林害虫防除工程について」岡山、植月景雄氏、KP剤による松喰虫の駆除作業工程、経費調査。

13. 「研究調査所見」広島、宇根岡現兵衛氏、調査研究、普及事業等についての所見。

14. 「根切虫の薬剤駆除とこれが植栽に及ぼす被害関係について」山口、笠井定雄氏。DD、クロールピクリンによる駆除と被害の調査。

15. 「薬剤注入によりて衰弱木を回生する方法について」山口、笠井定雄。250年生の老松に硫酸第一鉄、クルップ液を成長期に注入。

16. 「クスサンの防除について」愛媛、渡部乙彦氏。

17. 「マツバノタマバエの習性若干について」長崎、今村正治氏、成虫5月上旬羽化、クロマツとアカマツの被害差、幼虫越冬状況、天敵等。

18. 「松喰虫防除に関する一考察」宮崎、伊藤武夫氏、キイロコキクイムシ、オオゾウムシ、ゾウムシの一種から出た寄生蜂、その他4月発生のスギハムシの種類。

19. 「苗畑の根切虫の棲息数」鹿児島、石原研治氏、ネキリムシの棲息数の調査。

◇ 防疫ニュース綴じ込み表紙について

かねて予告しておいた綴じ込み用の表紙を本号に添付します。これはどこまでも仮綴じに使つていただくつもりのものでニュースが相当の厚みになつたとき製本用の表紙を添付したいと考えています。こんど表紙の図案のバックの緑文字は農林大臣の松くい虫駆除命令書です。中央の虫は勿論クリタマバチで当面の二大強敵をあらわしたつもりです。